

## Field Trip Report: [2024.4.27]

ディンセ 華純

## 【参加目的】

現地に行き、自分の目で見ること・自分の耳で直接聞くことにより、貧困・福祉への理解を深めたい・知識を増やしたいと思い参加した。私は貧困とメンタルヘルスの問題に関心を持ち、人生を通して何か貢献できればと考えている。しかし、貧困・メンタルヘルスの問題における原因・状況・当事者の考え・取り得る施策は多様であり、凝り固まったイメージや少ない知識で関わる事・考える事は害になりかねない。釜ヶ崎の状況やそこで学んだことは、自分が関わっている・将来関わる問題・人と同じではないが、少しでも知識・経験があることで、少しでも害を減らし、貢献を増やせればと思い参加した。

## 【今回の研修で学んだこと・考えたこと】

今回の研修では大小多くの学び・発見があったが、特に「地域的な貧困の改善に資するには、歴史的背景の理解が重要であること」・「行政・NGO・地域住民の協力の可能性およびその効果」について学ぶことができたこと、また「情報ごとの伝達速度・伝達方向の違いおよびその問題」について考えるようになったことが本研修で得られた大きな財産である。

## 「地域的な貧困の改善に資するには、歴史的背景の理解が重要であること」について

今回、江戸時代までさかのぼって街がどのように日雇い労働者の町に発展してきたか、その発展にどのように行政や企業が関わってきたかを詳しく説明いただいた。それにより地域の貧困・福祉の背景・現状をより深く理解することができたと感じた。

また、このような歴史的背景の理解が、より効果的な施策へとつながるのだと学んだ。例えば、不況の折に日雇い労働者が簡易宿所に宿泊できなくなった際には、一部の簡易宿所のアパートへの転換を推進し、日雇い労働者と簡易宿所の両方のためになる取り組みが実施されていた。このような地域特有の状況・課題を地域の人々の問題の解決に繋げるような施策は、受益者の状況だけでなく町全体の状況の理解が可能にした施策だろう。

さらに、街の歴史を知ることは、釜ヶ崎の日雇い労働者の方々の人生を垣間見ることもなった。働き続けたいという意思を持っている人が多いこと、大変なことが多かったとしても自分たちのこれまでの人生・仕事に誇りを持っている、という釜ヶ崎の人の説明が実感として感じられた。人が置かれている状況・そこから生まれる気持ちへの理解なしでは、支援することはおろか関係を結ぶことさえできない。だからといって、いきなりずけずけと話を聞くことはできない。そのため、歴史と言う側面から理解を深めることは、大切だと思った。もちろん、ステレオタイプ化することのリスクと表裏一体ではあるため、それに頼りすぎることは良くないが、関係を結ぶ・話を聞くための前提知識として持つておくべきものであると強く感じた。

今後もし自身が支援者となることがあれば、歴史的背景の理解におろそかにしない様にしたい。

## 「行政・NGO・地域住民の協力の可能性およびその効果」

今回のフィールドワークでは、行政・NGO・地域住民の協力による成功事例をいくつも見る事ができた。例えば違法屋台の問題やテントや炊き出しがある公園で子どもが遊べない問題に対して、行政・NGO・地域住民が同じテーブルに着き協議(萩之茶屋まちづくり拡大会議)し対応を勧めた結果、強制排除等ではなくヒアリングを伴う代替案の提案・相談を通しての移転が実現できていた。さらに公園の利用者である子どもとのワークショップも行われており、どのような公園が望まれるのか、まで考慮されていた。強制排除の形での変化ばかりを見てきたため、行政・NGO・地域住民が協力することで良い変化を可能な限り穏便に進めることができることを知り、

そしてその成果を実際に見ることができて良かった。自分が行政・NGO・地域住民のどの立場に関わったとしても、協力はできる・良い結果をもたらすことができるのだと諦めずにいられると思う。もちろん、簡単にできる話ではない。最近では行政全体の方針で切り倒された街路樹を、釜ヶ崎の地域は抗議により復活しているとのことであった。そのような意見を言うことができる・その意見を重視してもらえる関係を行政と築くのは半可なことではない。どのように行ったのかより詳しく知るため、ありむら潜さんの著作を読みたいと思った。

「情報ごとの伝達速度・伝達方向の違いおよびそれによって引き起こされる問題」

刺激が強い・わかりやすい情報である程、広がる速度が速く・広範囲に広がるという情報の特性が、釜ヶ崎の足かせになっていた。一時期・一側面の話が現在・全体の話とされ、怖い・ディープ・クレイジーな浮世離れした場所として強調されたコンテンツとして広がっていることは釜ヶ崎・そこに住む人々に不利益を及ぼしていた。

例えば、マナーも住民への尊敬もない観光客の増加や、立て替え予定のあいりん総合センターへの不法投棄の誘発などが起きていて、釜ヶ崎の安全・住環境に害をもたらしていた。ガイドのありむらさんが「このよう事をしていい場所だと思われる」と苦々しくおっしゃっていたことが印象に残っている。

また、「新今宮ワンダーランド事業」という「新今宮エリアの魅力が広く認知され、訪れて楽しいエリアになるようなイメージ向上を図ることを目的とした事業」がインターネット上で広く認知された際、「新今宮ワンダーランド」や「来たらだいたいどうにかなる」というキャッチコピーが貧困・住民をコンテンツ化するような施策だと批判されていた。私自身も本事業に対してそのようなイメージを持っていた。しかし、実際は日本のセーフティハブとして役割を果たしている側面やそこから生まれた先駆的な成功事例がある釜ヶ崎の価値を含め、新今宮地域の持っている魅力・ポテンシャルを広める試みであった。残念ながら、このような詳細は広く伝わっておらず、イメージ向上施策がこれまでのイメージに基づいて批判されてしまう状況になってしまっている。もちろん、そこに貧困があり、それを含めた地域の魅力のアピールをする時、貧困のコンテンツ化と言う側面が無いとは言いきれないが、だからと言って貧困のコンテンツ化であると断言するのも乱暴な結論である。むしろ、そのような側面を否定しきれないというその一点をもって批判をすると、貧困がある地域を貧困というイメージに縛り付けてしまい、そのイメージから発生する不利益から地域・地域住民を守ることは永遠にできない。そこから脱却するには正確な背景情報まで理解され、批判するにしても複雑な世界の内実を踏まえた議論がされる必要があるが、そのような情報は伝達速度が遅く、またしっかり内容を理解したいと思う人・できる人が少ないため、分かりやすいイメージとそこから発生する乱暴な議論に負けてしまっている。

しかし、情報伝達の特性による問題にどうしたら対抗できるのか、答えを出すことが難しかった。コンテンツ制作・配信者はコンテンツの閲覧数・評価数などに基づくコンテンツ配信プラットフォームからの収益および視聴者からの直接的な金銭・物品贈与や人気配信者になると言う承認欲求を得るために、それを止めるインセンティブが無い。むしろ更なる刺激・注目を求め大げさになっていく傾向にある。それに対抗するためのより正確・詳細な情報があったとしても、得てして刺激・わかりやすいとは言えないことが多いため、情報伝達力で負けてしまう。望ましい社会的イメージを広めるには、時間と地道な取り組みの積み重ねを行いつつ、コンテンツ消費者・情報の受け取り手のリテラシー・倫理観の醸成を待つしかないだろうか。研修中に答えを見つけることは難しかったが、現代のインターネット・SNS社会を生きる人間として大切な問いを得られたと思う。

【最後に】

日本のサービスハブである釜ヶ崎で、貧困・福祉政策について見る・知ることができ、大変学びが多かった。機会を提供して下さった京都大学アジア研究教育ユニット、萩之茶屋地域周辺街づくり合同会社、そして釜ヶ崎の皆様へ感謝したい。